営農インフォ

営農総合センター　指導販売課 072（444）8001

水稲

◆籾（もみ）すり

乾燥後の籾がまだ温かいときに籾すりをすると、肌ずれ米や胴割れ米が多くなる。そのため、乾燥後常温になってから籾すりを行う。

◆稲わらのすきこみ

毎年、稲わらをすきこんでいる田と、そうでない（焼いたり持ち出したりしている）田とでは、水田の地力に大きな差がつく。稲わらのすきこみを10年続けると、地力チッソとして分けつ期から出穂前までの間に10a当たり約1kgが供給される。

稲わらのすきこみは、稲わらを分解する土壌微生物の活動が盛んな地温の高い時期を目安として、稲刈り後できるだけ早い時期に行う。湿田や冬期に堪水しやすい水田では、排水溝を作り表面水を排除する。低地の湿田など水管理ができない水田や山間地などの有機質の分解が遅いほ場では、稲わらの施用を避ける。

また、この時期のすきこみは冬眠前のジャンボタニシの殺貝にも効果がある。すきこみ時には稲わらの腐熟を促進させるため、石灰窒素を10a当たり20kg程度施用し速やかに耕うんする。

野菜

たまねぎ

◆定植

定植の2週間前に堆肥を10a当たり2t、苦土石灰を10a当たり100kg施す。中生種のアンサーは11月中旬、ターザンは11月中下旬に、晩生種の七宝甘70は11月中下旬、もみじ3号は11月下旬を目安に定植する。苗の大きさは、葉数3枚で径5㎜程度が適期である。大苗になるほど冬の低温の影響を受けやすく、抽台の危険も増えるので注意する。

定植時、植え付けの深さは2～3㎝、根が地表に出ないように注意し、株元は乾燥防止のため軽く押さえておき、定植直後は活着促進のためたっぷりとかん水し土壌を十分湿らせる。

乾燥が激しい場合は、かん水もしくは、うね間に走り水をすると良い。

除草剤（表）は、定植後ひと雨後の土壌が適湿な条件であるので、その時に処理をする。

キャベツ

◆管理

冬採りキャベツが結球時期に入る時は、肥料切れにならないよう結球が始まるまでに追肥を終える。結球が始まってから追肥すると、結球が遅れたり、裂球したりするので注意する。降雨後は速やかに排水をし、また乾燥が激しい場合はうね間に走り水をすると良い。

◆病害虫防除

菌核病にかかった株には、ねずみの糞のような黒い塊がつき、これが土の中に残って次年度の伝染源となるので注意する。被害株は、必ずほ場の外に持ち出し処分し、ベンレート水和剤（2000倍／収穫7日前まで／6回以内）等を散布する。

また、コナガ・ヨトウムシは幼虫が成長すると薬剤が効きにくくなるので、初期防除を徹底する。発生を認めたら、直ちにトレボン乳剤（1000～2000倍／収穫3日前まで／3回以内）か、アファーム乳剤（1000～2000倍／収穫前日まで／3回以内）等を散布する。

＊キャベツの病害虫に登録がある農薬は表2を参照。

ねぎ

◆病害虫防除

さび病の発生に注意する。気温が22度前後の雨の多いときに発生が多い。特に秋に発生すると翌年春に被害が多くなるので防除に努める。

発病前から予防的に、ペンコゼブ水和剤（600倍／収穫14日前まで／3回以内）を散布し、発生初期には、ラリー水和剤（2000倍／収穫7日前まで／3回以内）、アミスター20フロアブル（2000倍／収穫3日前まで／4回以内）等を散布する。

水和剤を使用するときは展着剤を加えるが、フロアブル剤・乳剤の場合は展着剤を混用すると薬害を生じる場合があるので、展着剤混用に当たっては事前にその適否を確認すること。

こまつな・しゅんぎく

◆土づくり

冬の間に土づくりを行う。収穫後は完熟堆肥を10a当たり3～5t施すか、もしくは切りわらを10a当たり500kg程度を施すのも良い。

◆病害虫防除

しゅんぎくのハウス栽培では菌核病により、立ち枯れ症状や下葉のずるけが発生することがあるが、菌のまん延を防ぐために、菌核病が発症した株はほ場の外に持ち出す。

11月の農作業

農薬の登録内容は頻繁に変更されます。農薬は最新情報を確認して使用しましょう。最新情報は府・農の普及課、JA、Web版大阪府農作物病害虫防除指針（http://www.jppn.ne.jp/osaka/shishin/shishin.html）から。
農産物の病害虫発生予防については大阪府環境農林水産部農政室推進課病害虫防除グループ（http://www.jppn.ne.jp/osaka/）

表1 たまねぎに登録のある除草剤

薬剤名	HRACコード	10a当たりの農薬使用量	10a当たりの散布液量	使用方法	使用時期	本剤の使用回数
クロロIPC※	23	200～300㎖／10a	70～100ℓ／10a	全面土壌散布	定植活着後または中耕後ただし収穫30日前まで	2回以内
ゴーゴーサン乳剤30	3	300～500㎖／10a	70～100ℓ／10a	全面土壌散布	定植後（雑草発生前）ただし収穫60日前まで	1回

※HRACコードが同一であれば、有効成分が異なっていても同一系統の薬剤なので、連用は避けなくてはならない。
※クロロIPCは気温が20度以下で使用する。

表2 キャベツの病害虫に登録がある農薬

薬剤名	RACコード	病害虫名	希釈倍数	使用時期／使用回数	10a当たりの散布液量
ベンレート水和剤	F：1	菌核病・根朽病	2000倍	収穫7日前まで／6回以内	100～300ℓ／10a
ベルクート水和剤	F:M07	菌核病	1000倍	収穫14日前まで／3回以内	100～300ℓ／10a
トレボン乳剤	I：3A	アオムシ、コナガ、ヨトウムシ、アブラムシ類	1000～2000倍	収穫3日前まで／3回以内	100～300ℓ／10a
アファーム乳剤	I：6	アオムシ、コナガ、タマナギンウワバ、ハイマダラノメイガ、ハスモンヨトウ	1000～2000倍	収穫前日まで／3回以内	100～300ℓ／10a
プレオフロアブル	I：UN	アオムシ、コナガ、オオタバコガ、シロイチモジヨトウ、ハイマダラノメイガ、ハスモンヨトウ	1000倍	収穫7日前まで／2回以内	100～300ℓ／10a
ブロフレアSC	I：30	アオムシ、コナガ、オオタバコガ、ハイマダラノメイガ、ハスモンヨトウ	2000～4000倍	収穫前日まで／3回以内	100～300ℓ／10a

※RACコードが同一であれば、有効成分が異なっていても同一系統の薬剤なので、連用は避けなくてはならない。

表3 ねぎのさび病に登録がある農薬

薬剤名	FRACコード	希釈倍数	使用時期／使用回数	10a当たりの散布液量
ペンコゼブ水和剤	M03	600倍	収穫14日前まで／3回以内	100～300ℓ／10a
ラリー水和剤	3	2000倍	収穫7日前まで／3回以内	150～300ℓ／10a
アミスター20フロアブル	11	2000倍	収穫3日前まで／4回以内	100～300ℓ／10a
アフェットフロアブル	7	2000倍	収穫前日まで／2回以内	100～300ℓ／10a

※FRACコードが同一であれば、有効成分が異なっていても同一系統の薬剤なので、連用は避けなくてはならない。

＊農薬名の後の括弧内は、（希釈倍数／使用時期／総使用回数）を表示しています。

果樹

◆園内の清掃

越冬する病原菌や害虫の密度を下げ、病害虫の発生を抑えるためには、落葉・枯れ枝・落ちた果実などは園外に持ち去り処分する。

みかん

◆適期収獲

11月に入ると早生温州の収穫最盛期を迎え、下旬以降は中生種・普通温州の収穫も始まるが収穫が遅れて浮皮にならないように注意する。

また、品質のばらつきを少なくするため、着色の良いものから収穫する。特に、すそ成り果や内成り果などは、着色や品質を確認しながら順次収穫する。

◆秋肥の施用

11月下旬頃には地温が下がり、根の活動がほぼ停止するため、肥料成分の吸収がほぼなくなる。まだ施肥していない園では、11月上中旬までに燐加安S403を10a当たり60kg、またはみかん配合を10a当たり100kg施用する。

◆みかんの腐敗防止対策

みかんの腐敗は、青かびや緑かびによるものが多い。これらの病原菌は、果実の傷口から侵入して発病するため、はさみ傷や押し傷、引きもぎ等に注意して、収穫・運搬・選果の作業を丁寧に行う。貯蔵病害（灰色かび病、青かび病、緑かび病、黒腐病）予防のためにベルクートフロアブル（1000～2000倍／収穫前日まで／3回以内）を収穫1週間前に散布する。

もも

◆元肥の施用

まだ施肥の終わっていない園では、地温が低下する前の11月中旬までに、みかん配合を10a当たり100kg施用し軽く中耕する。

なお、マンガン欠乏症が発生した園では、硫酸マンガンを10a当たり10～20kg施用する。